

**処方薬の「家庭内保存」と「個人間譲渡」
実態調査**

平成22年6月11日

**株式会社QLife(キューライフ)
株式会社ネグジット総研**

【調査実施概要】

▼調査責任

株式会社QLife、株式会社ネグジット総研

▼実施概要

- (1) 調査対象： 1年以内に病院または診療所を受診した子持ち主婦
(歯科医院、整体・接骨院などは除く)
- (2) 有効回答数： 1,000人
- (3) 調査方法： インターネット調査
- (4) 調査時期： 2010/05/25～2010/05/30

▼有効回答者の属性

(1) 性別：

女性	男性	合計
1,000	0	1,000
100%	0%	100%

(2) 年代：

20代	30代	40代	50代	60代	合計
42	332	323	207	96	1,000
4%	33%	32%	21%	10%	100%

(3) 受診頻度：

36回程度 (例：月1回×3院、 または月3回×1 院)、ないしそれ 以上	24回程度 (例：月1回×2院、 または月2回×1 院)	12回程度 (例：月1回×1 院)	6回程度	2回程度	合計
189	242	240	231	98	1,000
19%	24%	24%	23%	10%	100%

▼備考

本調査は、「処方薬」に限定して、その家庭内保存ならびに個人間譲渡の実態についてアンケートを行った。調査票において「処方薬」を、「病院のなかで購入したり、医師から処方箋が出て院外薬局で購入した薬を指します。」と定義、説明した。

【調査の背景】

「処方薬の家庭内保存」や、それを背景とする「処方薬の個人間譲渡」は、事故につながる危険も十分にあり、ところが実態としては、薬が余った場合には、利便性や節約などを理由として「使えるときのために」とそのまま保存してしまう家庭も多い。そして、適切な服薬か否かを医療者に相談することもなく、あるいは使用期限が切れていたのに気づかずに、家族内や友人・知人間で譲渡し、使用してしまうケースも珍しくない。

本調査では、その実態を明らかにするとともに、その解決の糸口を見つけることを目的として、1年以内に医療機関受診経験がある子持ち女性に、アンケートを実施した。

【結論の概要】

1. 85%の家庭に、余った処方薬が存在する。余った理由は「服用忘れ」が半数を占める。ただし若年層は「意図的に途中で服用止めた」「多めに処方してもらった」の比率が上がる。
2. 家庭内に処方薬が余っていても、25%の母親は、その事実を医師・薬剤師に隠す（聞かれても言わない）。
3. 半数の母親が、余った処方薬を医師に相談せず自己判断で、子供に使用（過去に本人用に処方されたものを含む）したことがある。
4. 16%の母親は、薬に使用期限があることを、知らない。
5. 60%の母親は、本人以外の処方薬を、家族間や友人・知人間で使いまわしたことがある。多いのは、痛み止め・解熱剤、湿布剤、風邪薬など。なお、風邪薬、抗生物質、睡眠薬・安定剤は、医療者に秘密にして個人間譲渡されやすい傾向がある。
6. 67%の母親が、処方薬の使いまわしは「怖い」と感じている。「怖い/怖くない」は、処方薬の使いまわしをする/しないに、強く関係している。「怖い」群で使いまわしたことがある人は43%にとどまるのに対し、「怖くない」群では93%が使いまわし経験ある。リスクの啓発が、使いまわしの抑制につながる可能性が示唆された。

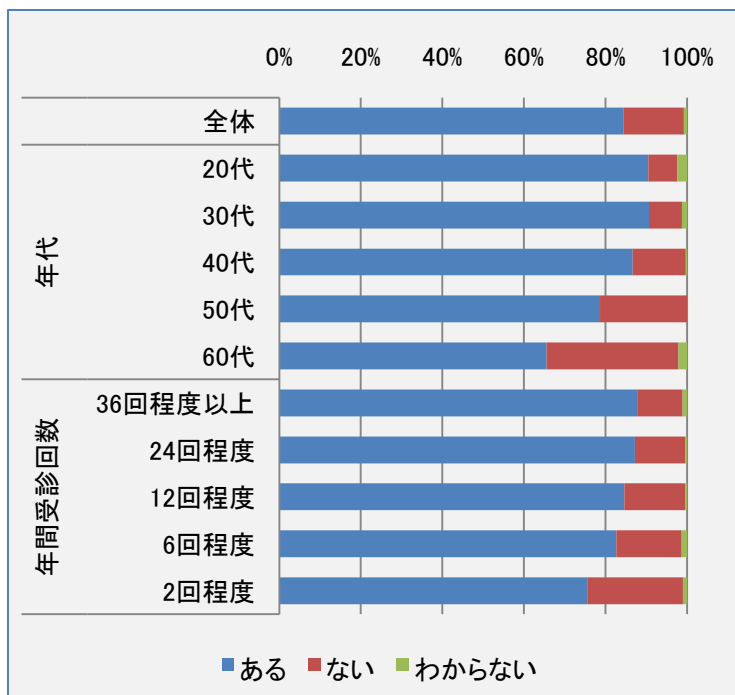
【調査結果の詳細】

1. 現在、余った処方薬(現在使用していない薬)が、家庭内にありますか。

いま現在、家庭内に余った処方薬を保存している人は、84.5%（「わからない」を母数から除外すると85.2%）にのぼった。

年代が若い方が、また受診頻度が高い方が、保存傾向は強い。20代30代では90%を超えている。

		ある	ない	わからない
全体		84.5	14.7	0.8
年代	20代	90.5	7.1	2.4
	30代	90.7	8.1	1.2
	40代	86.7	13.0	0.3
	50代	78.7	21.3	0.0
	60代	65.6	32.3	2.1
年間受診頻度	36回程度以上	87.8	11.1	1.1
	24回程度	87.2	12.4	0.4
	12回程度	84.6	15.0	0.4
	6回程度	82.7	16.0	1.3
	2回程度	75.5	23.5	1.0

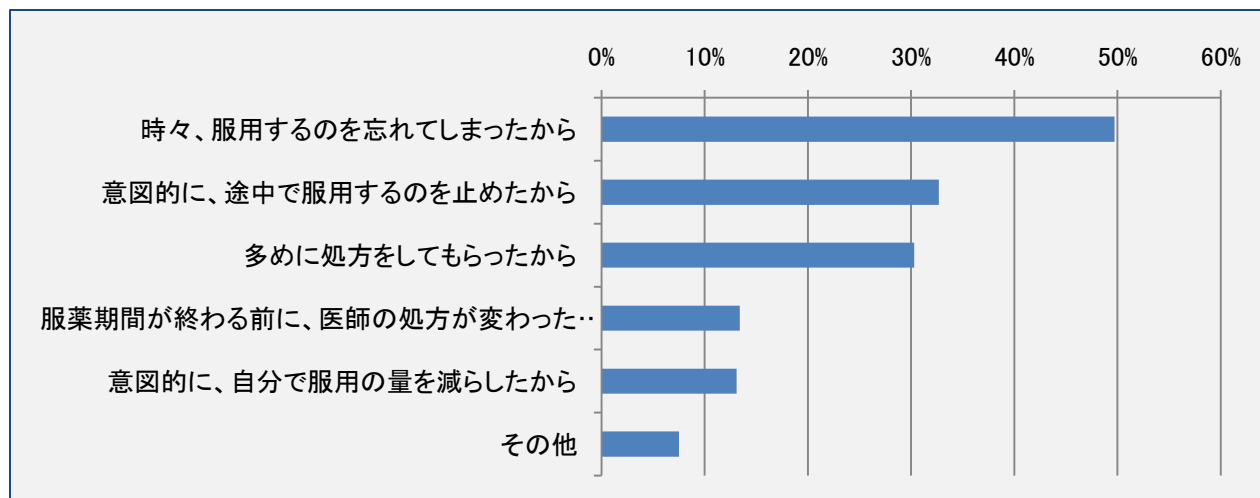


2. その「家庭内にある余った処方薬」は、なぜ余ったのですか。(複数選択)

使わない処方薬が家庭内にあると答えた人にその理由を聞いたところ、最も多かったのは「服用忘れ」で半数に及んだ。その次に続くのが「意図的に、途中で服用をやめた」と「多めに処方してもらった」。「意図的に、途中で止めた」には、医師の指示に反して患者が自己判断で止めたケースも相当含まれると思われ、第一位の「服用忘れ」とあわせて、「服薬コンプライアンス」(薬品の服用を規則正しく守ること)上の問題と、処方薬家庭内保存の問題は、強く関係していることがわかった。

なお、「その他」の具体的内容には、「頓服用だったから」が多くを占めたほか、「熱が出たときの座薬は常備してある」「痛み止めは置いておいてもいいといわれた」といった内容が見られた。

時々、服用するのを忘れてしまったから	49.7
意図的に、途中で服用するのを止めたから	32.7
多めに処方をしてもらったから	30.3
服薬期間が終わる前に、医師の処方が変わったり、主治医が変わったから	13.4
意図的に、自分で服用の量を減らしたから	13.1
その他※	7.5
合計	146.7



※「その他」の具体的内容の例:

頓服薬で使用しなかった分があるから	40代
症状(ぜんそく)が出たらすぐ服用した方が良いから。休日などで受診できないこともあるので。	40代
熱が出たときの座薬は常備してある	30代
痛み止めなので、置いておいて頭痛の時使ってもいいといわれたから。	30代
痛み止めをもらったが、使わなかった	50代
妊娠がわかって使えなくなったから。	20代
副作用が出たので服用をやめた	50代

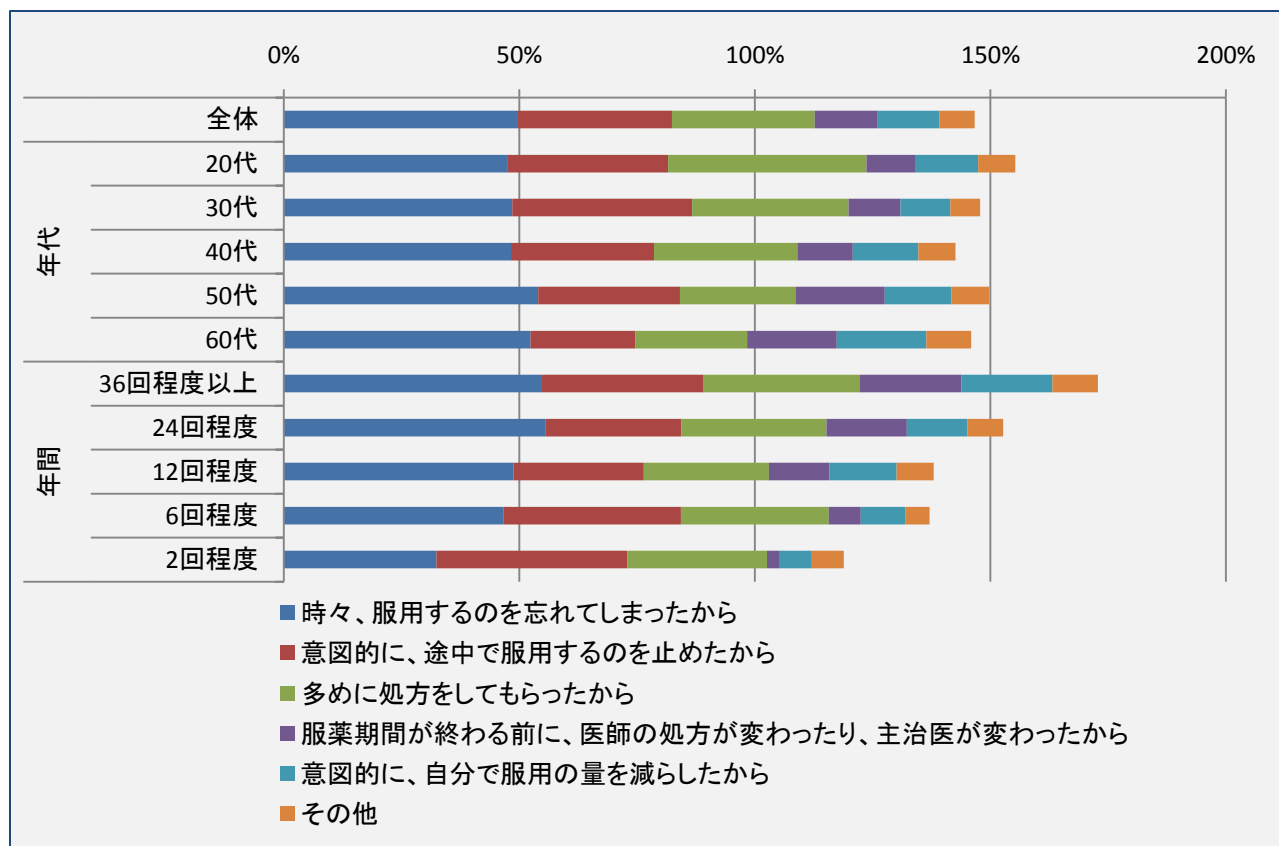
<前ページから続く>

2. その「家庭内にある余った処方薬」は、なぜ余ったのですか。(複数選択)

処方薬が余った理由を「年代別」にみると、50-60代の方が慢性疾患への処方が多いのか、「忘れた」「途中で処方が変わった」が多く、逆に20-30代は「途中で止めた」「多め処方」の比重が高い。

「受診頻度別」にみると、頻度が高い人ほど、「途中で止めた」以外の理由があてはまる傾向がある。すなわち、服薬機会が増えるほど複合的に薬が余っていく様子が見えてくる。

		時々、服用するのを忘れてしまったから	意図的に、途中で服用するのを止めたから	多めに処方してもらったから	服薬期間が終わる前に、医師の処方が変わったり、主治医が変わったから	意図的に、自分で服用の量を減らしたから	その他
全体		49.7	32.7	30.3	13.4	13.1	7.5
年代	20代	47.4	34.2	42.1	10.5	13.2	7.9
	30代	48.5	38.2	33.2	11.0	10.6	6.3
	40代	48.2	30.4	30.4	11.8	13.9	7.9
	50代	54.0	30.1	24.5	19.0	14.1	8.0
	60代	52.4	22.2	23.8	19.0	19.0	9.5
年間受診頻度	36回程度以上	54.8	34.3	33.1	21.7	19.3	9.6
	24回程度	55.5	28.9	30.8	17.1	12.8	7.6
	12回程度	48.8	27.6	26.6	12.8	14.3	7.9
	6回程度	46.6	37.7	31.4	6.8	9.4	5.2
	2回程度	32.4	40.5	29.7	2.7	6.8	6.8

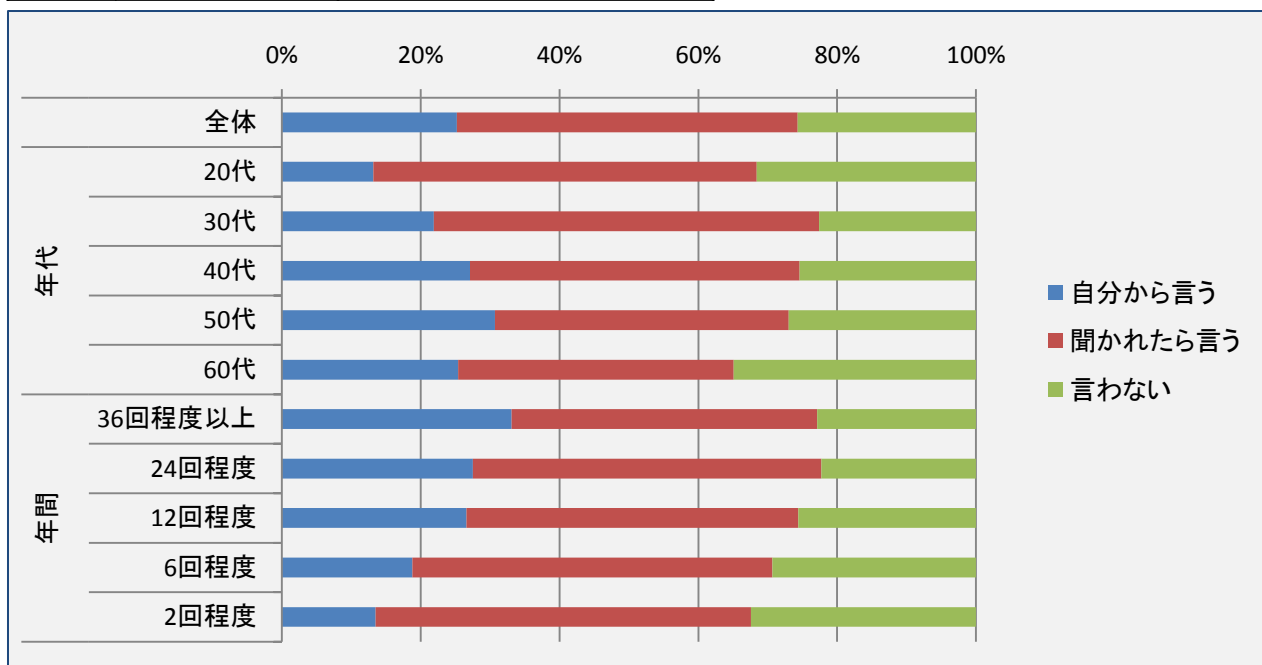


3. 処方薬が家庭内に余っていることを、医師又は薬剤師に言いますか。

薬が家庭内に余っていることを、医療者に積極的に告げる人は25%。逆に、聞かれても言わない人が、ほぼ同じ26%いる。この「申告」派と「言わない」派(いずれにしても能動派)が、年代が高まるにつれて増え、2極分化する傾向が見える。

「受診頻度別」にみると、高頻度の人の方が、医療者との関係性が近いいためか「能動的申告」派が多く、「言わない」派の比率は減る。

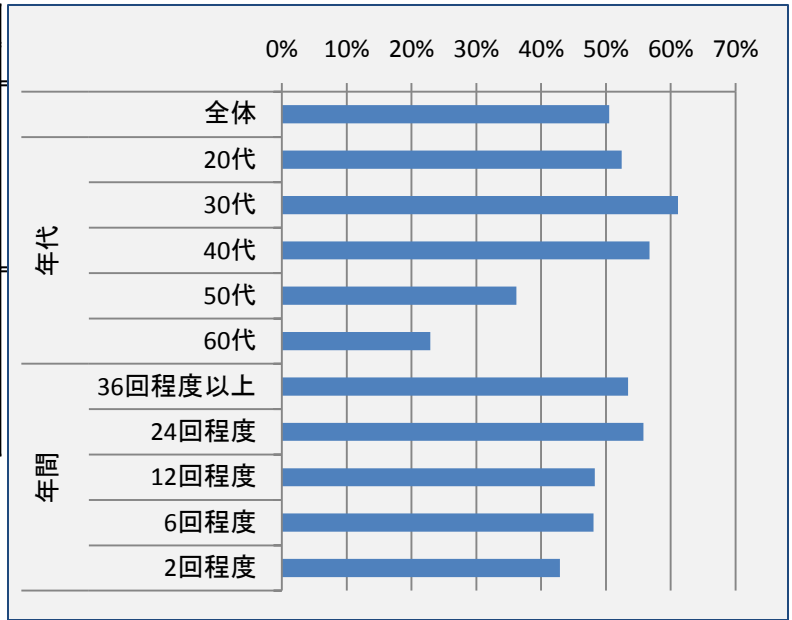
		自分から言う	聞かれたら言う	言わない
全体		25.2	49.1	25.7
年代	20代	13.2	55.3	31.6
	30代	21.9	55.5	22.6
	40代	27.1	47.5	25.4
	50代	30.7	42.3	27.0
	60代	25.4	39.7	34.9
年間受診頻度	36回程度以上	33.1	44.0	22.9
	24回程度	27.5	50.2	22.3
	12回程度	26.6	47.8	25.6
	6回程度	18.8	51.8	29.3
	2回程度	13.5	54.1	32.4



4. 自分の子供に、家庭内に保存してあった処方薬を、医師に相談せずご自身の判断で使用したことはありませんか。

余っていた薬を、自己判断で子供に使った経験がある人は半数に達した。ただし年齢が高い人や、受診頻度が低い人はその割合が低下する。

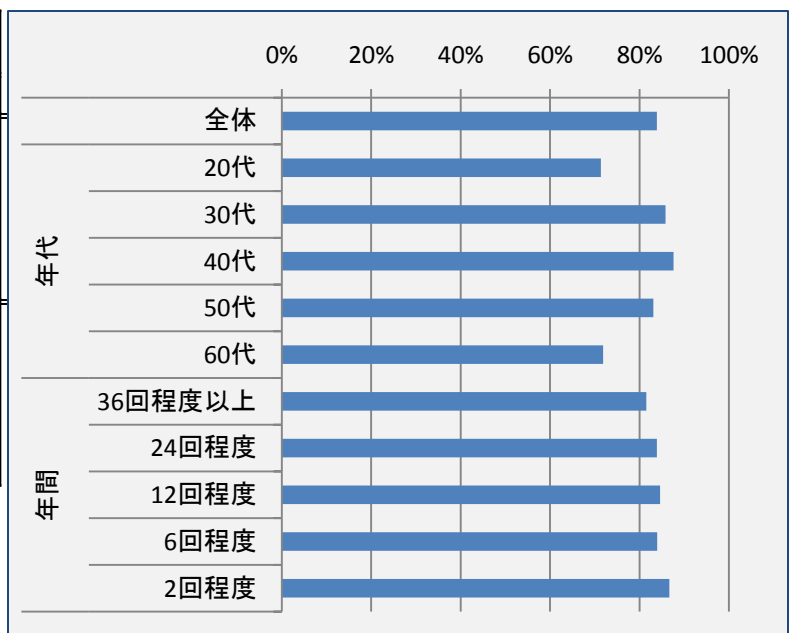
		ある	ない
全体		50.5	49.5
年代	20代	52.4	47.6
	30代	61.1	38.9
	40代	56.7	43.3
	50代	36.2	63.8
	60代	22.9	77.1
年間 受診 頻度	36回程度以上	53.4	46.6
	24回程度	55.8	44.2
	12回程度	48.3	51.7
	6回程度	48.1	51.9
	2回程度	42.9	57.1



5. 処方薬に使用期限(消費期限)があるのを知っていますか。

薬に使用期限があることを知っている人は84%にのぼったが、逆に言うと16%の人が期限があることを知らない。これは、「年代」や「受診頻度」にあまり関係がない。

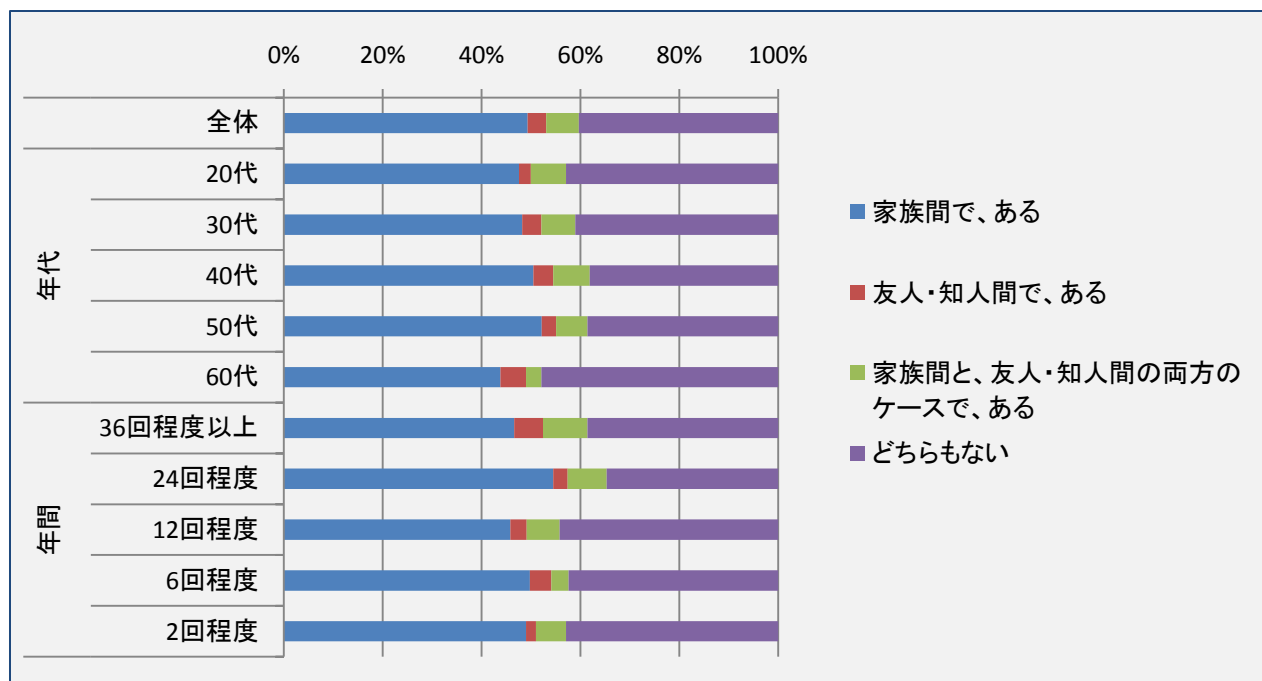
		知っている	知らない
全体		83.9	16.1
年代	20代	71.4	28.6
	30代	85.8	14.2
	40代	87.6	12.4
	50代	83.1	16.9
	60代	71.9	28.1
年間 受診 頻度	36回程度以上	81.5	18.5
	24回程度	83.9	16.1
	12回程度	84.6	15.4
	6回程度	84.0	16.0
	2回程度	86.7	13.3



6. 本人以外の処方薬を、家族間や友人・知人間で、あげたりもらったりしたことがありますか。

55.9% (=49.3+6.6) の人が処方薬を家族間で使いまわしたことがあり、7.4% (=3.8+6.6) の人が友人知人間で使いまわしたことがある。家族・友人・知人の合計では59.7%にのぼる。年代別、受診頻度別での傾向差はあまり見られない。

		家族間で、あげたりもらったりしたことがある	友人・知人間で、あげたりもらったりしたことがある	家族間と、友人・知人間の両方のケースで、あげたりもらったりしたことがある	どちらもない
全体		49.3	3.8	6.6	40.3
年代	20代	47.6	2.4	7.1	42.9
	30代	48.2	3.9	6.9	41.0
	40代	50.5	4.0	7.4	38.1
	50代	52.2	2.9	6.3	38.6
	60代	43.8	5.2	3.1	47.9
年間受診頻度	36回程度以上	46.6	5.8	9.0	38.6
	24回程度	54.5	2.9	7.9	34.7
	12回程度	45.8	3.3	6.7	44.2
	6回程度	49.8	4.3	3.5	42.4
	2回程度	49.0	2.0	6.1	42.9



7. 家族や友人・知人間で、あげたりもらったりすることが多い処方薬は、どんな薬ですか。

使いまわされることが多い処方薬は、「痛み止め・解熱剤」が最も多く、続いて「湿布剤」「風邪薬」「塗り薬」が多い。「その他」選択者が具体的に挙げたものは、漢方薬(葛根湯など)などが多かった。

なお、「医療者への申告傾向」属性別に見たところ、「シップ剤、胃薬・整腸剤」は“堂々と使い回され”やすく、「風邪薬、抗生物質、睡眠薬・安定剤」は、“秘密にして使いまわされ”やすいと言えるかもしれない。

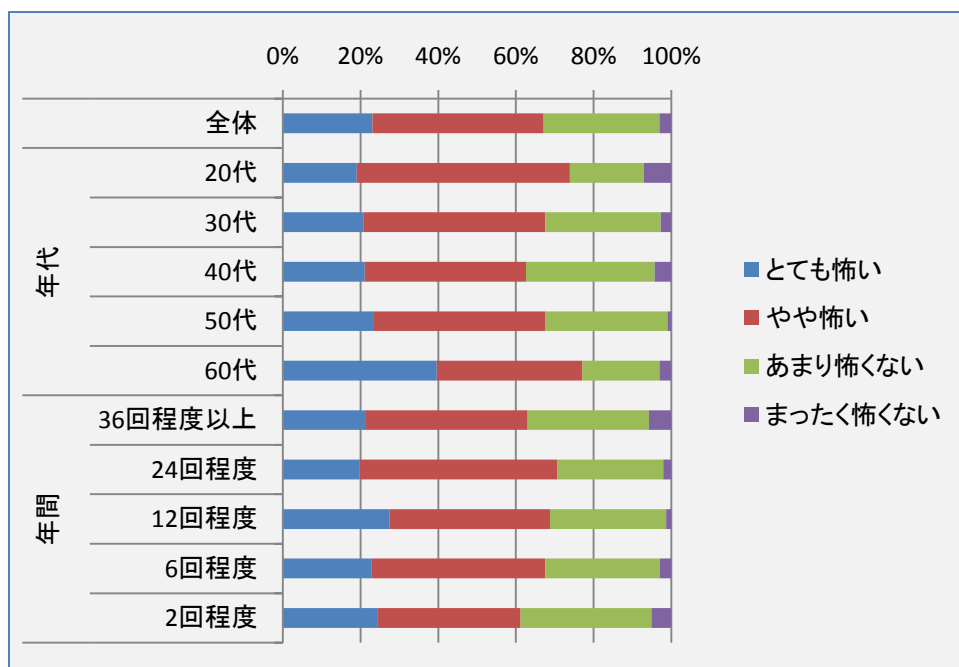
薬剤の種類	全体平均	自分から言う	聞かれたら言う	言わない
痛み止め・解熱剤(ロキソニン、ボルタレン、アンヒバ、カロナール、など)	60.5	58.6	61.0	63.8
シップ剤(モーラス、アドフィード、ボルタレンなど)	54.4	61.7	55.1	49.3
風邪薬(PL、ムコダイン、アスベリン、など)	46.7	42.1	46.1	52.2
塗り薬(リンデロンVG軟膏、アンテベート軟膏、ヒルドイドソフト、など)	40.0	42.1	41.6	39.9
胃薬・整腸剤(ガスター、ムコスタ、ビオフェルミン、など)	37.4	42.1	38.2	35.5
アレルギー薬・花粉症の薬(アレグラ、アレロック、アレジオン、クラリチン、など)	25.8	27.8	24.3	28.3
抗生物質(フロモックス、セフゾン、メイアクト、など)	13.7	12.8	11.6	21.7
目薬(ヒアレイン、カリーユニ、リボスチン、クラビット、など)	12.2	12.8	13.1	13.0
睡眠薬・安定剤(ハルシオン、マイスリー、デパス、コンスタン、など)	7.4	8.3	6.0	9.4
下剤(プルセニド、ヨーデル、アローゼン、ラキシベロン、など)	6.7	5.3	7.9	6.5
水虫薬(ラミシール液・クリーム、マイコスポール液・軟膏、など)	4.4	5.3	5.2	2.9
血圧・心臓の薬(ニトロ、アムロジン、アダラート、ディオバン、プロプレス、など)	1.3	2.3	0.7	2.2
コレステロール薬(メバロチン、クレストール、ベザトール、など)	0.7	1.5	0.4	0.7
その他	4.7	7.5	5.2	1.4

⇒「薬が余っていることを医療者に申告するか否か」の回答群別に見たときに、全体平均での値よりも相対的に10%以上高い数値となっている欄、ただし絶対値が5%以下のものは除く

8. 本人向けに処方されたものではない処方薬を、使ったり、使わせることについてどう思いますか。

処方薬の使いまわしを「怖い」と感じる人は、67.1% (=23.1+44.0)にのぼる。
 年代別、受診頻度別ではあまり傾向差が見られない。年代や受診頻度が上がると、薬の副作用に関する知識や経験が増えると思われるが、それを緩和する「慣れ」が生まれるのだろうか。

		とても怖い	やや怖い	あまり怖くない	まったく怖くない
全体		23.1	44.0	29.8	3.1
年代	20代	19.0	54.8	19.0	7.1
	30代	20.8	46.7	29.8	2.7
	40代	21.1	41.5	33.1	4.3
	50代	23.2	44.4	31.4	1.0
	60代	39.6	37.5	19.8	3.1
年間 受診 頻度	36回程度以上	21.2	41.8	31.2	5.8
	24回程度	19.8	50.8	27.3	2.1
	12回程度	27.5	41.3	30.0	1.3
	6回程度	22.9	44.6	29.4	3.0
	2回程度	24.5	36.7	33.7	5.1



<前ページから続く>

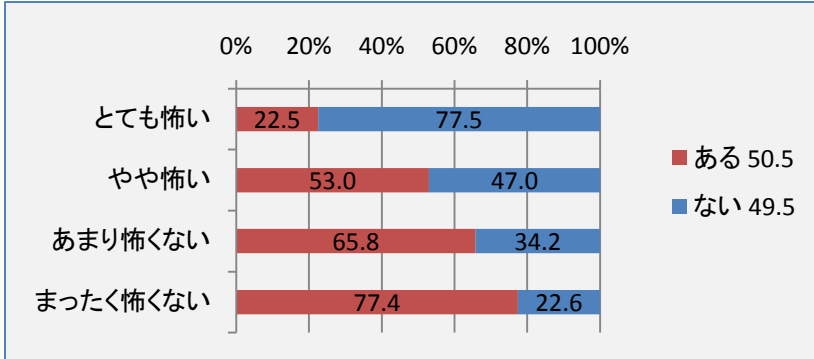
8. 本人向けに処方されたものではない処方薬を、使ったり、使わせることについてどう思いますか。

処方薬の使いまわしに対する恐怖の感じ方と、使いまわし行動との相関を見た。

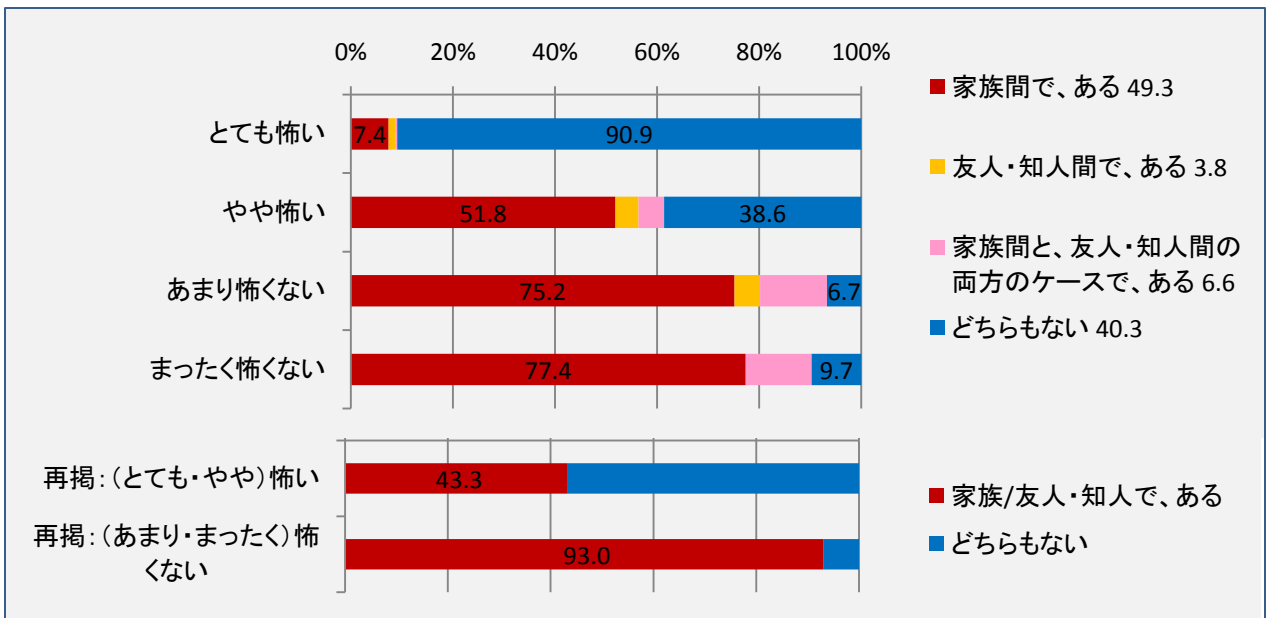
「余り処方薬を、子供に、医師相談なく使う」のも、「本人以外に、余り処方薬を使う」のも、恐怖度合いによって強く影響を受けている様子が見える。例えば、「(あまり+まったく)怖くない」群では、他人への使いまわし経験が93%にも上がるが、「(とても+やや)怖い」群では43%にとどまる。

リスクを啓発することが、使いまわしの抑制につながる可能性が示唆された。

▼自分の子供に、家庭内に保存してあった処方薬を、医師に相談せずご自身の判断で使用したことはありますか。



▼本人以外の処方薬を、家族間や友人・知人間で、あげたりもらったりしたことがありますか。



<前ページから続く>

8. 本人向けに処方されたものではない処方薬を、使ったり、使わせることについてどう思いますか。

さらに、薬剤種別に見ると、「塗り薬」「抗生物質」「目薬」は怖さを感じると使いまわさなくなるようだ。逆に、「シップ剤」「風邪薬」「胃腸・整腸剤」などは、怖さを感じても使いまわされやすい、ないし怖さを感じにくい薬であることが示唆された。

▼家族や友人・知人間で、あげたりもらったりすることが多い処方薬は、どんな薬ですか。

	怖い	怖くない
痛み止め・解熱剤(ロキソニン、ボルタレン、アンヒバ、カロナール、など)	55.3	65.4
シップ剤(モーラス、アドフィード、ボルタレンなど)	52.3	56.5
風邪薬(PL、ムコダイン、アスペリン、など)	46.1	47.3
塗り薬(リンデロンVG軟膏、アンテベート軟膏、ヒルドイドソフト、など)	35.4	44.5
胃薬・整腸剤(ガスター、ムコスタ、ビオフェルミン、など)	38.9	35.9
アレルギー薬・花粉症の薬(アレグラ、アレロック、アレジオン、クラリチン、など)	24.4	27.1
抗生物質(フロモックス、セフゾン、メイアクト、など)	8.9	18.3
目薬(ヒアレイン、カリーユニ、リボスチン、クラビット、など)	9.2	15.0
睡眠薬・安定剤(ハルシオン、マイスリー、デパス、コンスタン、など)	8.9	5.9
下剤(プルセニド、ヨーデル、アローゼン、ラキソベロン、など)	6.2	7.2
水虫薬(ラミシール液・クリーム、マイコスポール液・軟膏、など)	3.5	5.2
血圧・心臓の薬(ニトロ、アムロジン、アダラート、ディオバン、プロプレス、など)	1.7	1.0
コレステロール薬(メバロチン、クレストール、ベザトール、など)	1.0	0.3
その他	4.8	4.6

⇒「恐怖」度合いに関係なく使いまわされる/されない薬 (怖い/怖くない比が0.95以上)

⇒「恐怖」する人に使い回されず、「恐怖」しない人に使い回される薬 (怖い/怖くない比が0.80以下)

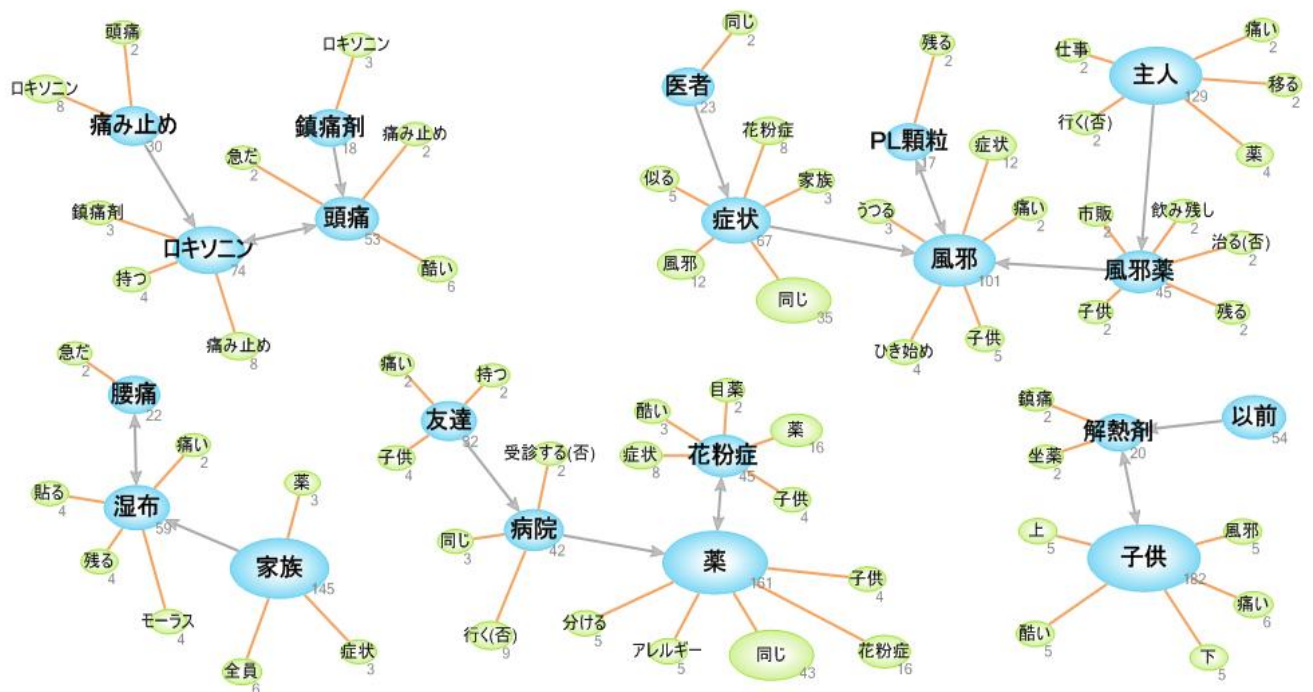
9. 家族間や友人・知人間で処方薬をあげたりもらったりした時の状況を、1つ、具体的に教えてください。

処方薬を使いまわした時の状況を具体的に記述してもらった。任意で回答した597件の文章をテキストマイニングしたところ、「薬-同じ」と判断した、つまり薬剤名を認識しての使いまわしが7%と一番多かったが、「症状-同じ」と症状を自己診断しての使いまわしも同じくらいあった。

ワード単位では、「風邪」「頭痛」「花粉症」「腰痛」「解熱(発熱)」といった症状関連の単語が頻出している。固有名詞では「ロキソニン」が多い、なお、「風邪」は「主人」が絡む言及がとりわけ大きく、「湿布」は「家族」、「解熱剤」は「子供」との関わりが大きい。

▼頻出する言葉の組み合わせ

No.	単語	品詞	件数	割合
1	薬 - 同じ	名 - 形	43	7.2%
2	症状 - 同じ	名 - 形	35	5.9%
3	腰 - 痛い	名 - 形	11	1.8%
4	調子 - 悪い	名 - 形	10	1.7%
5	頭 - 痛い	名 - 形	10	1.7%
6	病院 - 行く(否)	名 - 動	9	1.5%
7	胃 - 痛い	名 - 形	6	1.0%
8	歯 - 痛い	名 - 形	6	1.0%
9	頭痛 - 酷い	名 - 形	6	1.0%
10	症状 - 似る	名 - 動	5	0.8%



※青色の円は、出現ランキング上位の単語(名詞)を表示している。オレンジ色の線で紐づいている緑色の円は、青色の単語の係り受けの単語を表示している。グレーの矢印は、同時出現の関連性(共起の関係)の強い単語を表している。

本調査に関するお問い合わせ先:

株式会社QLife 広報担当

TEL : 03-5433-3161 / E-mail : info@qlife.co.jp

<株式会社QLifeの会社概要>

会社名 : 株式会社QLife(キューライフ)

所在地 : 〒154-0004 東京都世田谷区太子堂2-7-2 リングリングビルA棟6F

代表者 : 代表取締役 山内善行

設立日 : 2006年(平成18年)11月17日

事業内容 : 健康・医療分野の広告メディア事業ならびにマーケティング事業

企業理念 : 生活者と医療機関の距離を縮める

サイト理念 : 感動をシェアしよう!

URL : <http://www.qlife.co.jp/>
